

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 3 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520031

研究課題名（和文） 尊敬と公共性の哲学

研究課題名（英文） Philosophy of Respect and Publicness

研究代表者

清水 真木 (SHIMIZU MAKI)

明治大学・商学部・教授

研究者番号：50314711

研究成果の概要（和文）：

西洋哲学における公共性の概念史を尊敬概念との関連で解明した。尊敬概念の歴史を、自己了解との関係という観点から記述し、単なる倫理的、心理学的な枠組を超えて、尊敬と公共性との関係を明らかにした。自尊心は、「自分に対する尊敬」ではなく、反対に、他人に対する尊敬が自尊心から派生したものであることを確認した。また、尊敬の本質的機能が公共圏の基盤であることを明らかにすることにより、反対に、尊敬が十分に機能する対人関係、対人関係の場として公共圏の姿を記述することを試みた。

研究成果の概要（英文）：

This study revealed the meaning of “publicness” in the history of Western philosophy in relationship with the concept of “respect”. I gave an account of the history of the concept of respect putting it in perspective of its relationship with the self-awareness and made the connection clear between respect and publicness. In opposition to the conventional naming, “self-respect” is not the “respect” given to and by “oneself”. On the contrary, “self-respect” is *quid juris* more primordial than “respect” in general. “Respect” is nothing but the offspring of “self-respect”, and the “self-respect” extended afterwards toward others. Based on the historical account, I set out to scrutinize and elucidate the outline of function of the public sphere that should be the place of the communication where the respect is fully functional.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：“哲学”・“哲学・倫理学”

キーワード：尊敬、公共性、教養、他者、自由、責任、実践的三段論法、妬み

1. 研究開始当初の背景

公共性をめぐる現代の倫理的な言説では、ロールズにおいて典型的に認められるように、尊敬は、重要な役割を担う概念として

重視されていた。これに対し、たとえば、マックス・シェーラーのように、哲学史の内部には、尊敬に重要な役割を与えることなく対人関係を記述する試みも見出される。しかし、

いずれの場合においても、現代哲学の内部では、尊敬は、「何らかの好ましき」という以上の厳密な規定を与えられぬまま語られてきた感情であり、このかぎりにおいて、「尊敬とは何か」を明らかにすることは、ぜひとも必要であると考えられた。

2004年から3年間、科学研究費補助金(若手(B)16720004、研究課題「西洋哲学における友情概念の問題史的研究」)にもとづき、私は、友情と公共性の関係を明らかにすることを試みた。そして、この研究の過程において、公共圏におけるさまざまな対人関係をめぐる哲学的な言説において、私が他人に対して抱く感情、あるいは、他人が私に対して抱く感情が、厳密に規定されることなく、しかし、対人関係と自己了解の両方にとり重要なものとして繰り返し姿を現すことに気づいた。特に尊敬という感情に注目したのは、一方において、怒りや悦びや悲しみなどは異なり、日常生活において頻繁に姿を現すものではなく、それにもかかわらず、対人関係の前提として、哲学的な言説において特権的な位置を与えられているように思われたからである。

なお、これに関連する業績としては、「尊敬の零度」(『思想』994号、岩波書店、2007年2月5日、21-35頁)において、尊敬と自尊心との関係を主題的に取り上げ、研究の枠組を示した。この他、先に科学研究費補助金によって行った研究の成果として発表した『友情を疑う 親しさという牢獄』(中公新書、2005年9月25日)、および、快樂と喜悅との差異を主題的に取り上げた「喜悅への意志」(『人間科学研究(広島大学大学院総合科学研究科紀要I)』1巻、広島大学大学院総合科学研究科編、2006年12月25日、53-64頁)が、感情の概念史的研究として、この研究の主題に関連する周辺テーマを扱っていた。

2. 研究の目的

この研究は、「尊敬」という感情が公共圏において担う機能を手がかりとして、感情と公共性との関係を明らかにすることを目的とする。

私たちにとって身近なさまざまな感情の中で、尊敬という感情は、特殊な位置を占めるものとして理解されねばならない。というのも、一方において、ロールズの指摘をまっまでもなく、他人に対する尊敬というのは、公共圏が組織化されるために不可欠の感情であるにもかかわらず、他方において、尊敬という感情が哲学史上初めて主題的に取り上げられてから、まだ、400年しか経過していないからである。

感情の意味を明らかにする試みに関し新

しい枠組を作り上げた紀元前3世紀以降のストア派の哲学者たちは、プラトンやアリストテレスにとり未知のものであった新しい感情をいくつも取り上げている。しかし、現存するかぎりにおけるストアの文献には、尊敬という感情をめぐる記述を見出すことはできない。尊敬は、特殊近代的な感情であると考へねばならぬ。この研究では、清水真木「尊敬の零度」(『思想』994号、岩波書店、2007年2月5日、21-35頁)において予備的に示した枠組とプログラムにもとづき、主としてデカルト以降の哲学者たちにより、尊敬がどのように理解されてきたかを概念史的に確認し、他人に対する「尊敬(respect)」「自尊心(self-respect)」を根拠にするものとして理解されてきたことを確認するとともに、この点にもとづき、尊敬と自尊心が公共性と不可分のものとしてとらえられねばならないことを、公共圏における対人関係を成立させるために欠かすことのできぬものであることを明らかにすることを目標とした。

感情と公共性、特に尊敬と公共性との関係を明らかにするという大きな枠組の内部において、最初に明らかにしなければならないのは、「尊敬」とは何であり、自分であれ、他人であれ、誰かに対する尊敬の感情を抱くことがどのようにして可能となるのかという点である。尊敬は、日本語では一語によって表現されており、このかぎりにおいて、尊敬が単純な感情であるという事実が注意が向けられることはあまりない。しかし、西欧近代各国語の語彙には、この「尊敬」という言葉に正確に対応する名詞が欠けており、文脈に応じ、いくつもの異なる表現を与えられながら主題化されてきた。そして、哲学者たちが西欧近代各国語の語彙の範囲で尊敬に対して与えることを試みる探究の輪廓と文脈は、時代を遡るほど曖昧になって行く。ある人物が、社会的な地位から区別された「人格」のようなものの価値にもとづいて尊敬の対象となるというのが尊敬をめぐる通俗的な理解であるとするなら、時代を遡るほど、地位から独立した人格のようなものが表現される機会が少なくなり、したがって、通俗的な意味における尊敬の感情を抱く機会もまた少なくなることが、古い時代になるほど、尊敬について語られることが少なくなることの理由であり、尊敬が近代に固有の感情とならざるをえなかった理由であると思われる。そして、また、同じ事情によって、尊敬概念の歴史を記述する試みもまた、混乱したものにとどまっている。

そこで、この研究では、尊敬の概念を問題史的、概念史的に辿り、「尊敬の歴史」を構成することを当面の目標とした。具体的には、私たちが「尊敬」という言葉を用いて指し示しているもの、その意味を漠然と了解してい

るものが何を指し示しているのかを確認し、その上で、主としてデカルトの『情念論』に代表される17世紀の感情論から、ヒューム、カント、ヘーゲル、ベルクソンなどを経てロールズにいたる古典的な文献を辿りながら、哲学史上、私たちが「尊敬」と呼んでいる感情が、どのような文脈の内部において扱われてきたのかを確認する作業が必要であった。

尊敬は、自己了解を基礎とするものであり、尊敬によって自己了解もまた可能になる。上記の論文において述べたように、多くの哲学者がこのように理解していることが予想される。この研究では、この相互依存の関係がどのようなものであるかを確認することにより、公共圏において尊敬が担う役割を明らかにすることを目指した。

なお、この研究は、参照すべき直接の先行研究を持たないものである。これまで付随的な形でしか取り上げられてこなかった尊敬の感情を、それ自体として取り上げるという点にこの研究の特徴がある。そして、この特徴は、次の2つに分節することができる。

第1に、尊敬概念の歴史を、自己了解との関係という観点から記述し、単なる倫理的、心理学的な枠組を超えて、尊敬と公共性との関係を明らかにする新しい枠組を設定する点。具体的には、他人に対する尊敬が自尊心から派生したものであるという観点から概念史を記述する点にこの研究の特徴がある。

第2に、尊敬が公共圏の基盤であるなら、尊敬の意味を明らかにすることにより、尊敬が十分に機能する対人関係、そして、対人関係の場として公共圏の姿を記述することが可能になるということが予想される点。このかぎりにおいて、尊敬の意味を明らかにする試みは、政治哲学の内部に位置を占めることが可能になるに違いない。

3. 研究の方法

この研究では、「尊敬」という感情が、尊敬する者の自己了解と不可分の関係にあることを確認するという観点から概念史を整理することが、欠かすことのできぬ作業となった。もちろん、自己了解が尊敬の基礎となるばかりではなく、自己了解の方もまた、尊敬を基礎づけることになる。

このような循環を、上記の論文「尊敬の零度」において素描した枠組にもとづいて遂行し、現代の政治哲学における「好ましい社会」をめぐる主要な立場、リバタリアニズム、コミュニタリアニズム、リベラリズムなどを、批判的に検討し、公共圏の輪廓を辿りなおすことを試みた。

4. 研究成果

(1)「尊敬」は近代に固有の感情であり、ストア派に代表される古代の感情論の文脈の内部において、尊敬はいかなる位置も占めてはいない。尊敬をめぐる哲学的な言説が初めて登場するのは近世になってからであり、その典型はカントに求められるのが普通である。

そこで、『人倫の形而上学』『実践理性批判』などのテキストを手がかりにして、「尊敬」をめぐるカントの見解を整理することを試みた。18世紀の英語圏、ヒュームやアダム・スミスにおける尊敬をめぐる評価と対比することにより、尊敬における「道徳法則」の役割を強調するカントの見解と具体的なコミュニケーションにおける尊敬の機能とのあいだの関係（あるいは関係の不在）を確認した。これは、カントが尊敬というものに与えた存在論的な位置というものを明らかにする手がかりとなるものであるように思われる。

とはいえ、カントの尊敬理解は、尊敬の概念史の内部ではむしろ孤立したものであり、尊敬とは何かという問に答える試みに共通の枠組を与えるものとは考えられてこなかった。そこで、カント以前に、ストア派の感情論の復権として姿を現した感情論の、特にデカルトの『情念論』を中心にして、尊敬論の「古層」を明らかにすることを試みた。そして、この「古層」において問題になっていたものが、「私」の意のままにならない不透明な他者の存在であり、これがすべてに先立つものであることを明らかにした。

なお、公共性の輪廓を明らかにするという課題の一部として、近代に固有の概念としての「教養」概念の歴史と変質を公共圏の機能との関係において確認する作業にも携わり、市民的公共性と教養が一体のものであることを解明した。

(2)公共圏における尊敬の機能について哲学的な検討を試みた。

具体的には、公共圏において出会われる他者、さらに、公共圏とその外部との関係に着目して、主に「教養」概念と市民的公共性の概念の起源との関係を明らかにした。その際、公共圏における自尊心や尊敬というものが、必ずしも根源的なものではなく、むしろ、決疑論的な問題解決能力としての教養から派生したものである点を明らかにした。

このような作業により、「尊敬」概念の成立史の1つの局面に、昨年度までとは異なる視点から光を当てることができたと考えている。

(3) (1)および(2)にもとづく「尊敬」概念の検討をうけて、主に現代の政治思想における「リベラリズム」において、尊敬がどのよう

な意味を持っているのかを確認することを試みた。

その際に注意したのは、当初の研究計画に従い、感情論の観点からこの問題を取り扱うことであった。

哲学史において感情の意味を組織的に主題化する最初の試みは、紀元前3世紀に姿を現す。すなわち、哲学史に感情論を導入したのはストア派の哲学者たちであった。感情の問題に関するストア派の文献は、完全な形では何も残っていない。しかし、17世紀のヨーロッパでストア主義の復権が試みられ、その結果、ストア派の哲学は、近世哲学に無視することのできない影響を与えた。そして、デカルト以降の近世哲学のテキストをストア解釈として読むなら、感情が一種の認識であり、短縮された推論であることを確認することが可能となる。

したがって、感情というものが好ましくないものであるとすれば、それは、感情として表現された認識ないし推論が妥当なものであるとはかぎらないという点に見出されねばならない。実際、多くの哲学者たち、特にスピノザの『エチカ』には、この点に関する詳細な分析を認めることができる。これは、「受動性」概念および「決定論」との関係において理解されるべきものである。

そして、このような好ましくない感情、つまり、誤った推論ないし認識の表現としての感情を代表するものとして、特に「妬み」の問題を取り上げた。妬みは、公共性を脅かすものとして取り上げられるからである。この問題は、ロールズの「不平等原理」との関係で言及されることが少なくないけれども、すでに19世紀半ば、トクヴィルは、『アメリカの民主主義』において、民主主義が「妬み」と不可分のものであり、これを否応なく刺戟するものであることを指摘していた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 清水真木「風景の終り」、『思想』1030号、2010年、67-87頁。
- ② 清水真木「ニーチェは健康な人間の作り方を教えるか」、『理想』684号、2010年、31-41頁。

[学会発表] (計2件)

- ① 清水真木「大学に教養はあるか」(ワークショップ CSR概念とUSR概念、2012年10月22日、南山大学)。

- ② 清水真木「文化の意味について——土田杏村の場合」(哲学会第50回大会、2012年12月3日、東京大学)

[図書] (計1件)

- ① 清水真木『これが教養だ』、新潮社、2010年、222頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 真木 (SHIMIZU MAKI)
明治大学・商学部・教授
研究者番号：50314711

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：